

「市場主義」経済学のオルタナティブ」 ワークショップ報告

1. 目的・活動内容

「市場主義」経済学の批判的検討を行なうことを目的とする。現代経済の諸問題に対して、ケインズ経済学やマルクス経済学、制度の経済学などの多様な経済学のアプローチから接近を試みる。より具体的に言えば、現在の標準的な経済学は、失業の持続や経済格差の拡大、各国間のさまざまな制度的差異の持続など、現代経済の抱える問題を整合的に説明できていない。本ワークショップの意義は、このような現代経済の抱える諸問題を整合的に理解し、その解決を図るために、ケインズ経済学やマルクス経済学、制度の経済学など標準的な経済学とは異なるさまざまなアプローチを総合的に研究し、発展させることにある。

表 2018年度「市場主義」経済学のオルタナティブ」研究会一覧

No.	項目	内容
1	開催日	2018年11月3日(土)
	タイトル	マルクス生誕200年
	講師(所属)	伊藤 誠(東京大学名誉教授)、斎藤 幸平(大阪市立大学准教授)、森本 壮亮(桃山学院大学准教授)
	参加人数	20名
2	開催日	2019年1月9日(水)
	タイトル	世界のマルクス研究
	講師(所属)	マルセル・ムスト(ヨーク大学准教授)
	参加人数	12名
3	開催日	2019年1月16日(水)
	タイトル	「貨幣の世界システム」の成立—資本主義的貨幣信用制度の起源—
	講師(所属)	楊枝 嗣朗(佐賀大学名誉教授)
	参加人数	15名
4	開催日	2019年1月19日(土)
	タイトル	マルセル・ムスト著『アナザー・マルクス』について
	講師(所属)	マルセル・ムスト(ヨーク大学准教授)
	参加人数	10名
5	開催日	2019年2月27日(水)
	タイトル	チュルゴにおける資本と貨幣
	講師(所属)	黒木 龍三(本学経済学部教授)
	参加人数	3名

2. 研究会概要

■第1回 研究会

開催日：2018年11月3日(土) 14:30～17:00

会場：立教大学 池袋キャンパス 12号館2階会議室

第1報告：マルクス価値論と社会主義

報告者：伊藤 誠（東京大学名誉教授）

第2報告：21世紀の革命に向けて—ポストマルクス主義の政治主義批判

報告者：斎藤 幸平（大阪市立大学准教授）

第3報告：マルクスの資本循環論と転化論—E.モウズリのマネタリー理論に向けて

報告者：森本 壮亮（桃山学院大学准教授）

概要：伊藤誠氏は、「マルクス価値論と社会主義」をテーマとし、マルクスの価値論の現代的展開をフォローしつつ、その価値論を社会主義社会の建設にいかに関与することができるか論じた。

斎藤幸平氏は、「21世紀の革命に向けて—ポストマルクス主義の政治主義批判」をテーマとし、ポストマルクス主義の政治主義、制度主義、規範主義を批判的に検討し、新たに台頭しつつある21世紀のポストキャピタリズムの実践について論じた。

森本壮亮氏は、「マルクスの資本循環論と転化論—E.モウズリのマネタリー理論に向けて」をテーマとし、モウズリのマルクス価値論解釈をサーヴェイし、その意義と限界について論じた。

■第2回 研究会

開催日：2019年1月9日（水）17:00～18:30

会場：立教大学 池袋キャンパス 12号館4階共同研究室

報告：世界のマルクス研究

報告者：マルセル・ムスト（ヨーク大学准教授）

概要：前半にマルクスが（生前に刊行した）それらの著作を出版した目的について、後半にマルクスの死後に残された草稿がエンゲルスを始めとするさまざまな人物によって編集・刊行されてきた歴史を概観した。その後の質疑では、世界各地での最新の研究状況についての話も交えつつ、今後のマルクス研究について活発な議論が行われた。

■第3回 研究会

開催日：2019年1月16日（水）17:00～18:30

会場：立教大学 池袋キャンパス 12号館4階共同研究室

報告：「貨幣の世界システム」の成立—資本主義的貨幣信用制度の起源—

報告者：楊枝 嗣朗（佐賀大学名誉教授）

概要：資本主義的貨幣信用制度は、商業信用—銀行信用—中央銀行といったマルクスの理論の土台の上に成立するのではなく、17、8世紀にアムステルダムの預金銀行通貨（バンク・グルデン）が基軸通貨として、国際金融資本主義の中核となったオランダの通貨覇権にこそ、「貨幣の世界システム」の成立＝資本主義的貨幣信用制度の起源を求めることができる。17世紀に金融革新が起き、為替手形による取引が為替金融契約から引受信用に変化した。こうした為替手形流通の確立こ

そ、近代的金融市場の開幕を告げる金融革新である。この金融革新の基礎になったのが、アムステルダム銀行の銀行貨幣である。この銀行貨幣の存在が資本市場での金融資産の取引の増大をもたらし、バンコ・グルデンを基軸通貨にした。この銀行貨幣は計算貨幣であり、商取引・為替取引・為替相場の建値として使われた。それは金属の実体をもたなくても貨幣として機能し、オランダのバンコ・グルデンは17世紀以降、fiat money化した。そのことが基軸通貨の安定性を支えた。そうした事実は、18世紀末にイングランド銀行が発換停止を行ないポンドが不換通貨となった事態だけではなく、現代の不換通貨体制を解明するうえでも有益な示唆を与えているのである。

■第4回 研究会

開催日：2019年1月19日（土）14：00～16：00

会場：立教大学 池袋キャンパス 16号館第1会議室

報告：マルセル・ムスト著『アナザー・マルクス』について

報告者：マルセル・ムスト（ヨーク大学准教授）

概要：前半のムスト氏の講演では、ムスト氏の著書『アナザー・マルクス』について、インターナショナルを扱う諸章や、MEGAの資料に基づいて描かれたマルクス晩年の軌跡についてなど、その特徴が説明された。後半では佐々木隆治（本学経済学部准教授）より、既存のマルクス伝にない特徴など、同書の刊行意義についてのコメントを行った。

■第5回 研究会

開催日：2019年2月27日（水）

会場：立教大学 池袋キャンパス 12号館4階共同研究室

報告：チュルゴにおける資本と貨幣

報告者：黒木 龍三（本学経済学部教授）

概要：チュルゴは、未発刊で最後の重要な論稿の1つである『価値と貨幣』において、価値について主観価値説を展開し、貨幣の役割や銀行券について詳細に論じている。かれは、GalianiやCondorcetを読み、その上でかれ自身の「交換の理論」を提示した。商品の交換は、各個人の主観的な価値付けによって支配される、としながら、一方で、交換価値それ自体は、いかなる主観価値にも等しいとはいえない、と主張する。市場で成立する交換価値（＝市場価格）は、人びとの主観的価値付けを平均したものとして表れる。そして、交換行為は「等価交換」ではなく、「不等価交換」として考察されるべきだとした。

担当：荒川章義（本学経済学部教授）